

ふもとくし熊野

筆道資料の探訪

明治期の熊野筆

明治時代は我が国三千年の歴史上における最も大きな変改期で、あらゆる制度が一新され、書道もまたその例外ではありません。

明治新政府が唐様書家を採用し、文筆の官職につかせ、地方でもこれにならない、この結果御家流がますます衰運を加えてついに滅亡してしまいます。

毛筆元祖「佐々木為次先生碑」のそばに同じく向殿嘉右衛門が建てた芳名碑があり、その中に熊野筆の間屋元祖として向殿四良兵衛の名が刻まれています。四良兵衛は屋号「池田」と称した明治初期にあった熊野最初の筆問屋です。

明治五年八月十日、熊野村から第三大区御用所宛に文書が提出されていますが、その差出し

人は当時毛筆問屋を営んでいた

向殿四良兵衛と世良太三郎でした。この文書には、上方からの職人の指導によって筆の生産が追々繁栄し、多人数が渡世しており村内で生産された筆は諸国へ売広められ、近來芸州筆という名を揚げて「益々繁昌仕り一廉の村と相成・一統大慶の至りと存じ奉り候」と述べられており、この時期熊野筆の生産が相当増大していたことを示しています。

さらにこの文書の趣旨は、このように多人数になった職人が村内処々に居住しているため職人同志が材料などを融通し合うにも手間がかかり、商人が筆を仕入れるにも方々を歩きまわらなければならない、そのため便利のよい往来筋に町家のような

▶ 俗名 向殿四良兵衛之墓



長屋四十九戸を作り筆結職人を一か所に集めたと云う普請免許の願いでした。

この計画の成否は明らかではありませんが当時の職人の増加・筆生産の発展の状況を示しているもので興味深いものがあります。(熊野町史通史編)

既にして明治十年初めて内国博覧会を開催せらるゝや此の地「西尾 平」なるもの自製の毛筆を出品し入賞者の一員に列せらる。この頃毛筆製造戸数八百軒余、従業者一五〇〇余人・一ヶ年の産額二千二百余万對・価額三十万円を上下せり

(大正四年発行 安芸郡風教誌)